

新皇帝戴冠

『正史』に曰く、『若者が玉座に腰を下ろしたのは、それを最初に見た時から一二年の後であった』。帝国公文書館の膨大な記録は、帝国暦四七八年一月三日に催された新年祝賀の会に、当時の帝国軍幼年学校生徒が、同じ『黒真珠の間』への列席を許可された旨を語っており、出席者名簿の中のラインハルト・フォン・ミュゼルとジークフリード・キルヒアイスの名が、彼らが確かにその日数千の列席者に立ち交じってその場にであったことを示していた。

人生の半ばを遡るほどの遠い過去と言っておかしくはない一二年前のできごとを、ジークフリード・キルヒアイスはつい数ヶ月前のことのように思い出している。

あの時、ラインハルトの表情に気づいたキルヒアイスは思わず注意せずにはいられなかった。

「ラインハルト、目を！」

当時も今も変わらない、『超高温の焰を封印して冷凍された蒼い宝玉』に喩えられる、その双眸を、ラインハルトは『姉を奪った仇敵』へ真つ直ぐに向けていた。――歳の少年だけに可能な視線は、見咎められれば不敬の罪を問われるに違いないほどに、余りにもあからさまで直線的な敵意を封じ込めていたのだから。

聴覚の下限に辛うじて達するキルヒアイスの声が脳裏に理解を

生じさせたとき、ラインハルトは明らかに努力を振り絞る様子で、視線の槍を突き刺す先を、玉座の主から足下の豪奢な絨毯に変えた。視線が熱を孕むのであれば、あるいは絨毯に焦げ目が付き、炎を上げるのではないか、キルヒアイスは本気になって心配したものである。

それから約四〇〇〇日余り、ラインハルトと玉座を隔てていた九〇メートル余りの距離はゼロとなり、ラインハルトはローエングラム王朝初代皇帝として、自らをその座の主となさしめた。

「ジーク・カイザー・ラインハルト皇帝ラインハルト万歳!!」

「ジーク・カイザー・ラインハルト新帝国万歳!!」

キルヒアイス自身が主導した、ラインハルト即位への祝賀の叫びが、なお大波にも似て『黒真珠の間』をゆるがせ続けている。一度は玉座に座したラインハルトが、巧まぬ優美さと滑らかさを見せて立ち上がり、群臣に應えると、歓呼はさらに音量と密度を増して耳を劈つんざかんばかりのレベルにも達した。

キルヒアイスと一二年前の記憶を共有する者がいたとすれば、時代の移ろいの速さに、あるいはある感懐に達したかもしれない。一二年前、この場を埋め尽くしていたのは四〇〇〇余家にもおよぶ門閥貴族たちと、軍と帝国政府の高官たちだった。彼らの華麗な礼装の群は、同じく列席していた彼らの夫人達のドレスや宝石、装飾品と相俟って、天上の星々が地に舞い降りてきたのかと錯覚させるほどの煌めきと華やきに包まれたと称されたものである。

――二年前に劣ることのない盛会ではあっても、どちらかと言えば簡素さを感じさせるのは、列席者の中心が門閥貴族から帝国軍の首脳に移ったことにあるに違いなかった。黒と銀を基調とした軍礼

装を纏った彼らが玉座の前、最前列に厚い人の壁を作り、彼らの皇帝を賞賛する姿こそが、ローエングラム王朝の成り立ちを象徴的に示すものと、他の列席者たちに映っていても不思議ではなかった。

それだけでなく、かつての門閥貴族の大半がリップシュタットの戦いとその戦後処理の中で没落して姿を消したことで、軍と政府高官も顔ぶれを一新したこともあるに違いなかった。婦人の列席者が少数派に留まっているのも、彼らの多くがまだ配偶者を得ていない年齢に属するほどに、その平均年齢が若返ったことに理由を求められるかもしれない。

ラインハルトの登極に伴い、これまで女性の多くに対して閉ざされていた政府と軍の上級者への門もまた開かれている。事実、女性出席者の中には早くもその地歩を固めつつある政府・軍関係者の姿も少なくなかった。

帝国政府が女性の登用に消極的であった理由は、始祖であるルドルフに求むべきである。

「女性は家庭にあって家を守り、子を育て、夫を支えるべき存在であり、社会の表舞台に無用の口出しをすべきではない」

社会的な地位の獲得と、その裏付けとなる能力においては男女差よりも個人差の方がはるかに大きく有意であることは、ルドルフの時代を遡ること数百年前に確立された、社会的な通念である以前に事実だった。議会制共和主義政体を皇帝独裁の絶対王政によって篡奪する、ルドルフの政治的識見が歴史を数十世紀も逆転させるものであったとすれば、その社会的通念に対する意識もまたそれに近いものであった。

「女性の社会進出こそが、人類を墮落させたのだ」

古色蒼然を通り越して、当時ですら『化石?』、または『先祖返りか?』とまで酷評され、側近であったヨーゼフ・シュミットですら、『今、政府から女性を排除したら、政府の統治能力は半減以下となってしまう』として正面から反対したとの記録すら残されている。

だが、ルドルフは信念を変えず、『劣悪遺伝子排除法』の施行と前後して、公的機関における一定以上の地位への女性登用を禁止するに至った。『劣悪遺伝子排除法』施行当時の内務尚書エルンスト・ファルストロングがルドルフに対して、強引なまでに女性の社会からの排除を説いたとされる。

俗説に過ぎないが、ファルストロングには姉が二人おり、そのいずれもが彼に先んじて内務省の枢要の地位を占めていたと言つ。地位でも実力でも、姉たちにはるかに後塵を拝したことがファルストロングの、極端なまでの女性に対するコンプレックスと、その裏返しの蔑視を招いたというのである。ちなみに、この時期の内務省にはファルストロング姓の女性官僚が複数存在し、いずれもがルドルフによる寵免、あるいは左遷が確認されている。

『ルドルフにとって男女平等の思想は共和主義と同一としか見えなかったのだ。これはいかなる説諭を以てしても解くことのできなかった、ルドルフの誤謬である。同時に、彼の誤りを正し得なかった、彼を無謬たらしめるべき吾らの過ちである』

後にシュミットバウアー侯爵を名乗ることになるヨーゼフ・シュミットの手記は、ラインハルトの治下において初めて公刊され、当時のルドルフへの批判の強さが世に知られることになる。ただし、ヨーゼフは、ファルストロングの姉に関する話題については『俗説

である』と一顧だにしていない……ただ、それはまだ後日の物語である。

ともあれ、愚劣極まるルドルフの『社会的識見』は、『劣悪遺伝子排除法』同様に晴眼帝マクシミリアン・ヨーゼフ二世によって有名無実化されるまで、有形無形の軛となって帝国の女性を縛り付ける結果となった。晴眼帝の意を受け、皇后ジークリンデは女性の教育や社会進出について意を尽くし、社会に染みつきこびり付いた偏見の改善を図ったが、ジークリンデ自身がルドルフの残した過誤の大きさに対して、控えめではあるが絶望に近い非難の言葉を遺しているほどなのである。

リップシュタット戦役の結果、帝国の実権を把握すると同時に、ラインハルトは『劣悪遺伝子排除法』と共に、『ルドルフの悪しき遺産』の一掃に着手した。晴眼帝とジークリンデ皇后によつてすら完全には排除できなかった、ルドルフの名による登用制限は五〇〇年ぶりに帝国の社会から消滅した。結果、高級官僚への登用試験志願者に占める女性の割合は、今年度分で四〇パーセントに達する見込みだった。

無論、改革とは、新たに権利を享受する者と入れ替わりに、既得の利権や特権を奪い取られる者たちを生み出すことになる。

「なぜ、女たちを無用に厚遇するのか!？」

彼らの声に、しかし、ラインハルトは一顧だに与えなかった。

「厚遇などしていない。同じスタートラインに立つことを保証しただけだ」

一方、軍関係における女性の進出は、まだ余り進んでいないというのが事実だった。特に戦闘部隊においてこの傾向が顕著だった。

これは理由のあることで、ラインハルトも急がせはしなかった。

「時間をかけるしかないし、無理に第一線の戦闘部隊に女性を配する必要はないだろう。本当に有能な女性の前線指揮官が現れれば、組織側がそれに合わせて動けるようにしておけば良い」

ラインハルトによるこれらの施策に大きな寄与を為したと囁かれる人物の姿が、黒と銀の軍服の中にある。他の軍人達とほぼ同様の服装で、階級を示す肩章は中将だったが、僅かな化粧と襟元のオレンジ色のスカーフが彼女がうら若い女性であることを証明していた。

「フロイライン・伯爵嬢は、同盟軍に倣って女性将兵の最前線部隊の積極的登用をローエングラム公に進言し、認めさせた……でなければ、一兵の指揮もしたことのない、二〇歳そこそこの女性が栄えある帝国軍中将、幕僚総監の名をその身に帯びられるはずはない」

どのような組織も、その成員すべてに対して完全な満足を与えられるものではない。マリンドルフ伯爵嬢ヒルデガルトに対する、明らかに偏見の色眼鏡を経た噂を口にする人間は、今のところ極少の数に留まっているようだった。式典は新皇帝の即位への祝賀の歓呼の中に終始し、新たに帝国を統治することとなった体制への不満がわずかも囁かれることはなかった。

「一つの時代が、これで終わつたと言つべきだな」

公式の式典が滞ることなく終了し、祝賀のパーティに席を移した時、ウォルフガング・ミッターマイヤーが声をかけたのは、傍らに立つ同僚だった。

「ん——」

ミッターマイヤーよりも長身のその士官は、手にしたグラスを揺らめかせながら、左右異なる色合いの視線を僚友に落とした。
「ほう、宇宙艦隊司令長官殿は来たるべき平和の時代を前に、早くも髀肉の嘆を託っておられると、そういうわけか？」

言葉は皮肉を帯びていたが、表情と口調はそれを裏切って真摯な響きを伴っていた。

「案じるな、ミッターマイヤー。まだ、これで何もかもが終わりというわけではないさ。自由惑星同盟の命脈、旦夕に迫れりと言えども、一五〇年以上にわたって帝国と銀河を二分してきた巨大国家だ。それにフェザーンの黒狐の行方も知れてはおらんのだからな。このままなすことなく、ゴルデンバウムの後を追って退場ということはあるまい」

「まだ、過去系で言うには早すぎる、ということか」

信頼すべき僚友とグラスを合わせ、打ち合わされたクリスタル・ガラスの奏でる澄明な調べの中で、ミッターマイヤーは芳潤な液体を咽喉に滑らせる。

「新しく時代が始まった。これまでが散々な時代だったからな。それよりも良い時代であって欲しいし、なろうことなら長続きして欲しいと思うのは当然のことだろう」

「ローエングラム王朝がよりよい姿で、より長く続いて欲しい、そう言いたいわけか」

「卿は違つか、ロイエンタール」

「いや、違わない」

オスカー・フォン・ロイエンタールは曖昧に僚友の言葉を首肯して見せた。左目は、明らかにミッターマイヤーの言葉を肯い、未

来を見晴るかすかのよつに青く鋭く輝いていたが、右目は異なっていた。右目は、明らかに親友とは異なる世界を視野に入れて、深沈と深く沈み込む昏い閃きを湛えていたのである。

左右異なるロイエンタールの目の表情は、ミッターマイヤーの視界の外にあつたようだった。

「今すぐには言わないが、俺はいずれ、元帥閣下……いや、ラインハルト陛下に結婚をお勧めしようと思っている」

「結婚だと？」

自身にとつては不吉極まる単語をいきなり浴びせられたロイエンタールが、あからさまに忌避の表情を浮かべて身を引くのに、ミッターマイヤーは苦笑した。

「何を驚いている。卿に結婚しろと言ったわけではないぞ。俺に勧められたからと言って、その気になるような卿でもあるまい」

「それはそうだが……まだ、皇帝陛下は玉座に即かれたばかりだ。どうして、そこで結婚などと言つて発想がでてくるのだ？」

「だから、俺も、今日明日中にお勧めするとは言っていない。今は色々と慌ただしが、一年もすれば落ち着くだろう。別に結婚でなくとも良いのだ」

「ほう……」

驚いたよつに眉の端を釣り上げたのはロイエンタールの本心ではなかった。

「つまり事実が先行すれば良い、と言つか、卿らしくもない言い様だな」

「卿でもあるまいし……」

あるいはミッターマイヤーは心の裡でため息をついたかもしれ

なかった。

「婚約の発表でも良いと言いたかったのだ。そうやってあくまで茶化すつもりなら、この件で卿と話すのは止めにするぞ」

「……いや、悪かった。そんなつもりはなかった。気を悪くしないでくれ」

言い止し、ロイエンタールが視線を巡らした先に、ワインのグラスを合わせている父娘の姿があった。新たな王朝で国務尚書の印綬を帯びるマリィンドルフ伯爵と、その娘ヒルデガルトである。

「皇帝陛下の結婚、あるいは婚約によって新王朝の継続を保証し、その安定に信を置かしめる……か。卿も中々に政治家だな」

「血縁による相続が、政治体制の良き継承を意味する、などと無条件に思い込むほど、さすがに俺でも政治にも歴史にも無知ではない」

先回りするようなロイエンタールの応答に、あるいは揶揄の響きを聞き取ったのか、ミッターマイヤーの口調が僅かに棘を含まない。

「いや、済まぬ、ミッターマイヤー。俺も、我が皇帝を、ルドルフ以下のゴールデンバウムの皇帝たちと同列に置くつもりなどない。我が皇帝を貶めれば、それは皇帝を我が盟主と仰いだ自らを愚物と罵るようなものだ。天に唾する愚かしさだけは御免被りたいからな」

既に空になっていたグラスを給仕に預け、新たな一杯を手にとったロイエンタールは、グラス越しに祝賀の場を透かし見た。一瞬、黒みを帯びた紅の中に一切の光景が単色化される様子が、ロイエンタールにある種の夢を思い起こさせた。彼の右目をえぐり出そ

うと目許に擬された刃にも似ていたが、この時のロイエンタールの視界の中で、それは既に血濡れた紅い光を帯びていた。彼の母は、彼女が彼女の背徳の証と信じた我が子の右目を突き決めることは叶わなかった。あのナイフはついに血を纏わなかった。

が、グラスの向こう、紅く黒く揺らめいて見える光は血のそれ以外ではあり得なかった。ナイフではなく、白刃と言って良い。視界一杯を斜めに縦断して伸びた刃の手許にそれを擬する手があった。

「ん……？」

見覚えるのある手。白く繊細な貴婦人の手指ではない。鍛えられた鋼の靱さと、幾度となく自ら他者の生命を断ち切り、あるいは人をして敵を葬らしめてきた者の手だった。閃紅の刃を高々と掲げ、まさに振り下ろそうとする切っ先を辿った視界の中に光があった。全てが個性を失い、紅の濃淡のみとなった視野の中、そこだけが正視しがたい黄金色の光に満ちて、彼の切っ先を拒むかに見えていた。「拒む……のではないな。それは、許されていない」

ミッターマイヤーの不審の視線を頬に受けて、ロイエンタールは内心の呟きを、知らず言葉に変えていたことに気づいた。

「おい、ロイエンタール？」

「案じてくれる必要はないぞ、ミッターマイヤー。ちょっと考え事をしていただけだ」

「卿の夢にまで踏み込むつもりはないが……」

大きくため息をつき、ミッターマイヤーは小さく呟く。

「卿が血の色の夢をみているのではなければ、な」

「血の色の夢だなど、卿らしくもない言葉だな。さっきまで皇帝の

「結婚のことを案じていたというのに」

「……帝国の双璧が、皇帝ラインハルト陛下即位の祝典においてその結婚、あるいは結婚を語る場に居合わせることは、これは運が良いと言つべきなのか悪いと言つべきなのか、いずれでありましようかね」

「運の善し悪しはともかく、稀少な経験であることは確かだろうなフェルナー」

声をかけた本人は、あるいは双璧の不意を打つつもりだったのかもしれないが、振り向いたロイエンタールの表情は襲撃者の期待を完全に裏切っていた。

氷点以下とは言わぬまでも、低温と言って良い口調を切り返されたフェルナーは苦笑を隠してグラスを掲げて見せた。

「いえ、つい先日、軍務省でも同じ話題が出まして……」

「卿の見立てでは、オーベルシュタインの名を出せば、私が話題に食いつくと、そういうわけか」

「事実ですよ、釣りじゃありません。実際に軍務尚書が皇帝陛下に進言された……のか、これから進言するつもりなのかは分かりませんが、尚書の指示で軍務省ではお后候補の予備調査を始めています」

「な……」

「おい、ちよつと待て、ミッターマイヤー！」

ロイエンタールがその腕を取っていなかったら、ミッターマイヤーはその足でオーベルシュタインに駆け寄っていただろう。

「胡散臭い話だな。オーベルシュタインが実際にそんな指示をしたとしても、極秘事項だろう。こんな場で、それもミッターマイヤー

や私に話すようなことでもあるまい。オーベルシュタインの指示が与太話で、吾々の反応を覗つてこい、とても言われたのか？」

「極秘でも何でもありません。尚書の指示は、一六歳から二五歳までの、自由惑星同盟在住の亡命貴族の女性、もしくはその娘を洗い出せというものですよ。ただし、亡命時期はリップシュタット戦役よりも前で、係累ができるだけ少ない者。可能なら家族が一人もいないこと……そういう条件です」

「なんだ、それは、一体？」

完全に不得要領の表情になったミッターマイヤーを尻目に、ロイエンタールの視線が一瞬白刃を思わせて、オーベルシュタインの後ろ姿を窺いだ。

「……いかにもオーベルシュタインが考え出しそうなことだな」

「ロイエンタール？」

「知れたことだ」

皇帝の婚姻により、新王朝の継続と安定に保証を与える。オーベルシュタインの狙いはミッターマイヤーのそれと軌を一にする。ただ、ミッターマイヤーの想いが、自らの経験と重ね合わせての幾分かの甘さを帯びるのに対して、オーベルシュタインは全くの政治的イベントとしてのみ、皇帝の配偶者の決定を捉えている。

同盟居住者を対象とするのは同盟への懐柔策の一環であり、そこに亡命貴族の出身者という条件を加えるのは、亡命貴族であれば皇帝の後宮入りに対しても抵抗が少なからうとする配慮がある。旧ゴールデンバウムの宮廷と相容れずに同盟に新天地を求めた者であれば、ゴールデンバウム王朝を過去に葬ったローエングラム王朝に対してはより寛容であり得るに違いなかった。何にしろ、亡命者

にとって帝国は故郷に違いない。

「……では、係累の少なさとはなんだ？」

ロイエンタールの言葉を、嫌悪と忌避の苦汁を飲み下す口調でミッターマイヤーが問い返す。

「要するには外戚の排除だろう。奴の考えそんなことだ……」

半神的美貌に恵まれ、二三歳にして前王朝とフェザン、自由惑星同盟を征し、新王朝の開祖となった青年皇帝。オーベルシュタインを待つまでもなく、早晚、その婚姻が群臣のみならず新帝国臣民全ての関心事となるのは間違いない。オーベルシュタインが、敢えて公然と皇后の候補者探しを始めたのも、ことが人々の私的な関心事から新帝国政府にとっての公事となったあかつきに、彼の提示した条件が万人にとっての最初の条件となるよう、予めの刷り込みを狙ったのことも解釈できる。

かなりの偏見と嫌忌のバイアスを伴った解釈であることを、理解はしているが改める気にもならなかった。

「それは分かる……」

親友の表情に、ロイエンタールは苦笑する。それは分かる、分かるが納得できない。ミッターマイヤーは表情筋の全てを使ってそう主張しているように、彼には思われたのだし、おそらく外れてはいまい。

「皇帝の婚姻が政治だと言うことは理解しているが、ラインハルト陛下ご自身のお気持ちはどうなのだ？」

だが、ミッターマイヤーの次の言葉は完全にロイエンタールの虚を突いた。精神的にたたらを踏む思いで、彼は親友を見直した。

「我が皇帝のお気持ち……だと？」

「そうだ。政治なのはやむを得ないが、それでは皇帝陛下のお気持ちはどこに行ってしまうのだ？ 帝国の安定のためであれば、陛下にそのような婚姻を強いて良いというのか？」

「おい、ミッターマイヤー……」

要するに『愛のない結婚』とやらに反発しているのだろう。軍人としての才幹、人間としての器量において他に比する者は片手にすら足らぬ。ロイエンタールはこの親友をそう評価する。唯一の欠点があるとすれば、自ら進んで一人の女に人生を縛られ、縛られることを至上の幸福として主張する、『信じがたい自虐趣味』だ……ロイエンタールはそう思う。

「ですが、ミッターマイヤー提督、皇帝陛下が二夫一婦の制度をお守りになる必要もないでしょう」

「それではゴールデンバウムの皇帝どもと何も変わらないではないか」

決して大きくはないが、刃の烈しさを孕んだ口調に、フェルナーは甚だ鼻白んだ様子で口をつぐみ、ロイエンタールはゆっくりとかぶりを振った。これあるかな、我が親友よ。

「卿の言や良し、ミッターマイヤー。だが、一夫一婦制では万世一系の王朝は続かん。ルドルフの直系にしても、二代目で絶えているくらいだからな」

「……それで、ローエングラム王朝の皇統が後宮の裡で定められる。それを卿は容認するというのが、ロイエンタール」

「酔ったのか、ミッターマイヤー。ラインハルト陛下に配偶者をと言い出したのは卿だぞ。その口で、それはないだろう。だいたい、我が皇帝は吾らよりはるかに年下でおられる。順当に行けば、吾ら

の方が我が皇帝^{マイン・カイザー}よりも先にヴァルハラに赴くことになるのだ。次代の皇帝陛下の話など、気が早すぎるし、不敬に過ぎる」

「う……うむ。確かにそつだな。どうもあのオーベルシュタインがからむと頭に血が上らぬようにするのが一苦労だな」

明らかに不満そうに話題の終了を宣言し、ミッターマイヤーは不穏な一瞥をフェルナーにくれる。

「愉快な話題をもたらしてくれたな、フェルナー。感謝するぞ」

ミッターマイヤーにしては珍しく、オーベルシュタインの腹心……本人は大いに異論があるはずだったが……に突き刺した言葉は辛辣な皮肉に満ちていた。無論、オーベルシュタインの許にあつて胃腸炎も心因性ストレスにも無縁なフェルナーであつてみれば、引き際は心得たものだった。

「失礼を致しました、ミッターマイヤー提督。ロイエンタール提督、条件が条件ですから、滅多なことでは該当者は見つからぬかと思ひます。軍務尚書も本気で候補者を探し出すつもりではおられぬのかも知れませんかし……」

「どつという意味だ？」

視線と口調の双方に怒れる狼の剣呑さははらませたミッターマイヤーに、フェルナーは慌てて一揖し、帝国軍の双壁に背を向けた。フェルナーの後ろ姿に非好意的な視線を突き刺してから、ミッターマイヤーはグラスを大きく煽り、そして視線を転じる。その視線をたどり、ロイエンタールはため息と共に理解する。ミッターマイヤーは明らかに特定の女性を皇后候補に据えているに違ひなかつたし、実際のところロイエンタールも友人の選択に大きな異論はないと思つてゐる。

マリィンドルフ伯爵令嬢ヒルデガルト。昨年のバーミリオン会戦の際、彼女はミッターマイヤーのもとへ駆けつけ、同盟首都の直撃による同盟政府の無条件降伏要求を提案してきた。なぜ、ロイエンタールではなくミッターマイヤーを最初に訪れたのか。ヒルダの選択に対して、女性に対して高い評価を与える習慣のないロイエンタールにして、『敵に回せば多少厄介そつだ』程度には彼女のことを認識すると同時に、自分が彼女に対して無条件の信頼を得てはいないことを察してもいる。別段、だからといって痛痒を感じるほどのものではなかつたし、ラインハルトの周囲に、その皇后たるに相応しいだけの補佐能力のある女性が彼女以外にはいないことも認めるにやぶさかではない。

「ん……？」

ある違和感の存在にロイエンタールは気づいた。我が皇帝^{マイン・カイザー}、皇帝ラインハルトの配偶者。それがマリィンドルフ伯爵令嬢ヒルデガルトであるか、それともオーベルシュタインの主張する亡命貴族の子女であるかは別にしても、いずれ近い将来、彼自身を含めた帝国の未来図に現れてくることになる。そして、それに続くのは我が皇帝^{マイン・カイザー}の後継者の誕生である。

『我、膝を屈する先は余人にあらず、我が皇帝^{マイン・カイザー}のみ』

グラスの中の、ミッターマイヤーの言葉を借りれば『血の色の夢』。玉座に振り下ろした刃と、それを撥ね除けた黄金の光の中、誰の囁きとも知れず、しかし、ロイエンタールは幻聴とは思わなかつた。

祝宴の光とさんざめき、交わされる会話とグラスの煌めき、一切が周囲から消え失せる違和感の中、ロイエンタールは自らの呟き

を聞いていた。

「我が皇帝よ、ラインハルト陛下。我に隙を見せたもつな。我の光たり続けたまえ、誰が手にも不可侵の光であり続けたまえ。さなくば……」

その先の呟きを、ロイエンタールは心の裡深くに飲み込んだ。二度と心にのぼせることなからんことを祈りながらである。無論、誰に祈るのか、と問われれば、ロイエンタールにも回答の持ちようのないことに違いはなかったが……